

令和2年12月4日

## 令和2年度日本芸術院会員候補者の決定について

日本芸術院（院長 高階秀爾）は、芸術上の功績顕著な芸術家7名を、日本芸術院会員候補者として決定しましたので、お知らせします。

### 1. 日本芸術院会員候補者の決定

日本芸術院は、令和2年10月16日開催の会員候補者選考委員会にて選考の上、会員総会の承認を経て令和2年11月11日に7名を日本芸術院会員候補者として決定し、同日付けで日本芸術院長から文部科学大臣に上申しました。

令和2年12月15日付けをもって文部科学大臣から発令の予定です。

### 2. 文部科学大臣に上申した会員候補者（略歴・賞歴等は別添資料を御覧ください。）

#### 【第一部（美術）】

第一分科（日本画）	いとう ほうじ 伊藤 彰耳（本名：伊藤 欣哉）
第一分科（日本画）	むらい まさゆき 村居 正之
第三分科（彫 塑）	やまだ ともひこ 山田 朝彦
第三分科（彫 塑）	よしの たけし 吉野 毅
第五分科（書）	たかき せいう 高木 聖雨（本名：高木 茂行）

#### 【第二部（文芸）】

第九分科（評論・翻訳）	わたなべ もりあき 渡邊 守章
-------------	--------------------

#### 【第三部（音楽・演劇・舞踊）】

第十三分科（邦 楽）	ぶんの ひであき 豊 英秋
------------	------------------

#### <担当>

文化庁参事官（芸術文化担当）

参事官補佐：伊野 哲也（内線 2823）

総括・顕彰係長：富田 祐子（内線 2825）

電話：03-5253-4111（代表）

日本芸術院

事務 長：西村 泰雄

電話：03-3821-7191

日本画

いとう ほうじ  
伊藤 彰 耳  
(本名 伊藤 欣哉)



### 推薦理由

伊藤彰耳氏は、東洋の思想と仏教美術に造詣が深く、日本画の伝統の保存とその継承に対して、確固たる意志と情熱を持っている。多摩美術大学において、日本画を学び、小中学校や養護学校で教えながら院展に出品を続けた。日本の四季の豊かな自然や古典、歴史、人物等を取材し、長い年月をかけて研究し、時代を考証して描いてゆく制作態度は、堅実性と清潔感に溢れ、多くの日本画家の指標となっている。

### 【略歴】

昭和13年6月7日 福岡県生まれ 82歳

昭和36年 多摩美術大学美術学部絵画科（日本画専攻）卒業

昭和36年 東京都内区立中・小学校教諭（同43年まで）

昭和41年 再興第51回院展初入選（「菩提寺」に対して）

昭和43年 神奈川県藤沢市立白浜養護学校教諭（同47年まで）

昭和55年（財）日本美術院特待に推挙（同58年同人に推挙 ※同23年公益財団法人へ移行）

平成6年（財）日本美術院評議員（同23年(3月)まで、同24年(12月)から現在まで）

令和元年 南足柄の曹洞宗大雄山最乗寺に「道了尊首都圏御開帳の図」六曲一双屏風を納める

### 【賞歴】

昭和52年 再興第62回院展奨励賞（「無畏」に対して）（後4回）

昭和53年 第33回春の院展春季展賞（「大弁功德天」に対して）（後2回）

昭和54年 第34回春の院展奨励賞（「阿修羅王」に対して）（後2回）

昭和57年 再興第67回院展日本美術院賞大観賞（「空点」に対して）（後1回）

平成3年 再興第76回院展文部大臣賞（「産山・新牧（阿蘇外輪）」に対して）

平成8年 再興第81回院展内閣総理大臣賞（「出会・二ヶ月」に対して）

日本画

むら い まさ ゆき  
村 居 正 之



### 推薦理由

村居正之氏は、自らが作った絵の具を用いて、写実的でありながら心象風景としても表現された作品を制作している。原材料となる岩石の産地や粉碎後の粒の大小、加熱具合を研究するとともに、四半世紀もの間、ギリシャの世界遺産をモチーフとして追求、群青を主とした色の明暗・濃淡・色調の変化を模索し続け、独自の世界観を生み出すことに成功した。その一方で、長年にわたって後進の育成にも力を<sup>そそ</sup>注ぎ、現在も学生達<sup>たち</sup>に慕われる存在である。

### 【略歴】

昭和22年4月20日 京都府生まれ 73歳

昭和43年 青塔社入塾，池田遙邨に師事

平成 元年 岡山大学教育学部非常勤講師（同13年同大学院教育学研究科非常勤講師，同17年まで）

平成 6年 第26回日展審査員（後4回）

平成 7年 （社）日展会員（同17年評議員，同26年まで，令和元年理事，現在まで ※同24年公益社団法人へ移行）

平成18年 大阪芸術大学美術学科客員教授（同20年教授，同26年学科長，現在まで）

### 【賞歴】

昭和50年 第7回日展特選（「<sup>あか</sup>赤い<sup>りつきょう</sup>陸橋」に対して）（後1回）

平成11年 第34回日春展会員賞（「<sup>れき</sup>歴」に対して）

平成13年 紺綬褒章（後2回）

平成30年 改組新第5回日展文部科学大臣賞（「<sup>く</sup>暮れゆく<sup>とき</sup>時」に対して）

令和 2年 第76回恩賜賞・日本芸術院賞（「<sup>げっしょう</sup>月照」に対して）

## 彫塑

やま だ とも ひこ  
山 田 朝 彦



(撮影 丹保 太郎)

### 推薦理由

塑造は使用する材料の特質から、作者の存在の過程が<sup>いやおう</sup>否応なく強く表れるものである。山田氏の制作は、その学びの有様の特質から明らかにその作風を決定している。人体をベースにした表現を貫いていて、スマートな現代感覚に<sup>あふ</sup>溢れた美意識と、優れた形態観による美しさの追求は、現代具象彫刻の一つの典型を示している。大作から小品に至るまで細部に神経の行き届いた制作には今後の一層の充実と発展を期待させるものがある。

### 【略歴】

- 昭和18年10月10日 旧朝鮮平安南道生まれ 77歳
- 昭和41年 明治大学商学部卒業
- 昭和45年 太平洋美術研究所入所、彫刻を始める
- 昭和47年 第2回日彫展初入選（「男」<sup>おとこ</sup>に対して）
- 昭和49年 第70回太平洋展初入選、文部大臣奨励賞（「女」<sup>おんな</sup>に対して）
- 昭和49年 第6回日展初入選（「男」に対して）
- 平成6年 第24回日彫展審査員（後5回）
- 平成10年 第30回日展審査員（後5回）
- 平成24年 （公社）日展評議員（同26年まで、同28年理事、現在まで）
- 平成29年 第82回香川県美術展覧会審査員
- 平成30年 （公社）日本彫刻会理事・委員長（現在まで）

### 【賞歴】

- 昭和58年 第79回太平洋展会員秀作賞（「裸婦」<sup>らふ</sup>に対して）（後1回）
- 昭和60年 第81回太平洋展堀進二賞（「刻」<sup>こく</sup>に対して）
- 昭和62年 第19回日展特選（「雄」<sup>ゆう</sup>に対して）（後1回）
- 平成6年 第90回太平洋展安田火災美術財団奨励賞（「蒼」<sup>そう</sup>に対して）
- 平成19年 ワコー文化賞
- 平成21年 第41回日展日展会員賞（「悠悠」<sup>ゆうゆう</sup>に対して）
- 平成24年 第44回日展文部科学大臣賞（「こもれび」に対して）
- 平成28年 第72回日本芸術院賞（「朝の響き」<sup>あさひび</sup>に対して）

彫塑

よし の たけし  
吉 野 毅



### 推薦理由

吉野毅氏は、具象彫刻一筋に創作活動を続けてきた。飛鳥、天平時代の仏像や、古代ギリシャ彫刻の造形を研究して、現代女性の伸びやかな姿を清新に表現した優れた彫刻作品を発表している。彫刻と空間の斬新な関係を創出する庭園モニュメントにも、優れた作品を残している。(公社)二科会、(一社)日本美術家連盟等の役員を兼務し、多くの社会活動に貢献している。

### 【略歴】

昭和18年4月23日 千葉県生まれ 77歳

昭和42年 東京藝術大学美術学部彫刻科卒業 (同44年同大学院美術研究科彫刻専門課程塑像専攻修了)

昭和43年 第53回二科展初入選・特選 (「るい」に対して)

平成6年 (財)鷹山宇一記念美術振興会理事 (現在まで ※同23年公益財団法人へ移行)

平成8年 (社)二科会評議員 (同18年監事, 同20年理事, 同24年常務理事, 現在まで ※同24年公益社団法人へ移行)

平成13年 第42回青森県美術展覧会審査員

平成16年 (社)日本美術家連盟委員 (同17年まで, 同20年から同21年まで, 同24年監事, 同30年理事, 現在まで ※同24年一般社団法人へ移行)

平成17年 多摩美術大学造形表現学部造形学科客員教授 (同28年まで)

平成26年 第79回香川県美術展覧会審査員

平成29年 第59回秋田県美術展覧会審査員

令和元年 第73回高知県美術展覧会審査員

### 【賞歴】

昭和42年 安宅賞

昭和42年 サロン・ド・プランタン賞 (「るい」に対して)

昭和57年 第67回二科展ローマ賞 (「少女」に対して)

昭和60年 第70回二科展会員努力賞 (「わか女」に対して)

平成15年 第88回二科展文部科学大臣賞 (「夏の終り'03」に対して)

平成15年 千葉県教育功労者表彰

平成24年 第68回日本芸術院賞 (「夏の終り'11」に対して)

書

たか き せい う  
高 木 聖 雨

(本名 たか き しげゆき  
高木 茂行)



### 推薦理由

高木聖雨氏は、長年の深い思索とあくなき研究を重ね、古代文字による大字書作品を通じて、本物の書を模索している。また、すべての書法の体得を熱心実践し、他の作家の追随を許さない独自の世界観を構築し、書の普及や活動の支援、日中交流やユネスコ等海外への発信、大学教授としての後進の指導とその活動は多岐にわたり、存在感は芸術の世界にとどまることはない。

### 【略歴】

昭和24年9月8日 岡山県生まれ 71歳

昭和44年 青山杉雨に師事

昭和48年 大東文化大学日本文学科卒業

昭和49年 第6回日展初入選（「翼戴」<sup>よくたい</sup>に対して）

平成13年 第33回日展審査員（後4回）

平成15年 (財)全国書美術振興会理事（同28年理事長，現在まで ※同24年公益財団法人へ移行）

平成21年 (社)全日本書道連盟理事（令和元年副理事長，現在まで ※同23年公益社団法人へ移行）

平成23年 大東文化大学文学部書道学科教授（令和2年名誉教授）

平成29年 読売書法会常任総務・執行役員副代表（同30年総務部長，同31年審査部長，現在まで）

平成30年 (公社)日展理事（現在まで）

### 【賞歴】

平成 元年 第21回日展特選（「天馬」<sup>てんま</sup>に対して）（後1回）

平成18年 第38回日展日展会員賞（「協穆」<sup>きょうぼく</sup>に対して）

平成27年 改組新第2回日展文部科学大臣賞（「駿歩」<sup>しゅんぽ</sup>に対して）

平成29年 山陽新聞賞文化功労

平成29年 第73回恩賜賞・日本芸術院賞（「協戮」<sup>きょうりく</sup>に対して）

平成29年 大東文化学園栄誉章

平成29年 岡山県文化特別顕彰

わた なべ もり あき  
渡 邊 守 章



### 推薦理由

渡邊守章氏は、フランス文学，特に演劇を専攻し，多くの業績を達成してきた。フランス演劇の伝統と現代性とを結合し，その文学性・思想性の本質を解明する努力を重ねてきた姿勢は，先駆的かつ模範的なものとして広く評価されている。また，日本の能楽にも造詣が深く，能楽の演劇的な特質とフランス演劇との関連をめぐる独自の評論活動も注目される。

### 【略歴】

昭和8年3月20日 東京都生まれ 87歳

昭和38年 東京大学大学院人文科学研究科仏語仏文学専門課程博士課程単位取得満期退学

昭和39年 東京大学教養学部講師（同41年助教授，同54年教授，同63年総長補佐，平成元年まで，同2年同大学院総合文化研究科表象文化論専攻主任，同5年名誉教授）

昭和52年 「ポール・クローデル げまてきそうぞうりょく 劇的想像力 せかい の世界」により文学博士（東京大学）

平成5年 放送大学教授（同11年副学長，同16年名誉教授）

平成19年 京都造形芸術大学舞台芸術研究センター所長代理・教授（同20年所長・教授，同26年客員教授，同29年まで）

### 【賞歴】

平成18年 第43回日本翻訳文化賞（ポール・クローデル著「しゆす くつ 繻子の靴（翻訳）（上・下巻）」に対して）

平成18年 第60回毎日出版文化賞文学・芸術部門（ポール・クローデル著「しゆす くつ 繻子の靴（翻訳）（上・下巻）」に対して）

平成19年 第58回読売文学賞研究・翻訳賞（ロラン・バルト著「ろん ラシーヌ論（翻訳）」に対して）

平成31年 フランス・レジオン・ドヌール勲章シュヴァリエ章

令和元年 文化庁長官表彰

邦楽

ぶんの  
豊 ひで  
英 あき  
秋



### 推薦理由

豊英秋氏は、京都方楽家楽祖・豊原公連とよはらのきみつらから 38 代の名門に生まれ、宮内庁式部職として、歌謡・管絃・舞かんげんの各職域を修め抜群の評価を得て今日に至った。中でも笙しょうの演奏・右方舞の演技は格調高い気品に満ちたものとして、先師・識者の高い評価を受けており、重要皇室行事・国際交流等における活動は顕著である。氏は、同時に雅楽の古制を重視しながら常に芸術としての位置を意識し諸公演の企画監修に努めてきた。今日まで雅楽の継承発展に尽くした業績は極めて大である。

### 【略歴】

- 昭和19年3月27日 東京都生まれ 76歳
- 昭和31年 宮内庁式部職楽部予科生（同34年本科生）
- 昭和31年 宮内庁晩餐会において童舞「胡蝶」の舞人で初舞台
- 昭和40年 宮内庁式部職楽部楽師（平成5年楽長補，同15年楽長，同19年首席楽長，同21年楽部退官，技術指導員，同25年まで）
- 昭和45年 国立劇場主催「蘇志摩利」復活公演に参加
- 昭和52年 十二音会設立，委員長（現在まで）
- 昭和54年 先進国首脳会議 宮中晩餐会において一人舞「還城楽」を舞う
- 平成元年 「大喪の礼」において「誄歌」の句頭を担う
- 平成2年 「大嘗祭」「大饗」において国風歌舞の句頭を担う
- 平成5年 皇太子殿下御成婚を祝い管絃曲「竹慶楽」を作曲・初演
- 平成18年 「退走禿」の舞を復元・公演（雅楽翠篋会）
- 平成25年 神宮遷宮において久邇邦昭（元神社本庁統理）作曲「河水久澄」に作舞・奉奏
- 平成27年 蕪嶋神社より依頼「蕪嶋の舞」作曲・作舞
- 令和元年 靖国神社より依頼「国護の舞」作曲・作舞

### 【賞歴】

- 平成21年 第65回日本芸術院賞（「長年にわたる雅楽演奏家としての業績」に対して）
- 平成26年 瑞宝双光章

(1) 概要

日本芸術院は、日本芸術院令第3条に基づき、芸術上の功績顕著な芸術家の中から補充すべき会員を毎年会員による選挙を行い決定しています。

日本芸術院は、その前身である帝国美術院が森鷗外を院長として大正8年に創設されて以来、現在まで約100年の歴史を持ち、日本芸術院会員への選考は、美術、文芸、音楽、演劇、舞踊等の芸術各分野の芸術家から栄誉あることとして広く認識されています。

日本芸術院会員は、一般職の国家公務員（非常勤）で、年金額は250万円、任期は終身です。

(2) 選考方法

日本芸術院会員候補者の推薦は、毎年度、日本芸術院会員により行われ、全会員で組織する会員候補者選考委員会において選考します。その候補者について、各部において会員による投票を経て、総会の承認を得ることにより決定します。

(3) 選考経過

令和2年8月21日から9月4日までの間、日本芸術院の会員に対し候補者の推薦を求めたところ、第一部（美術）9名、第二部（文芸）10名、第三部（音楽・演劇・舞踊）3名、合計22名の推薦がありました。

令和2年10月16日に開催した全会員で組織する会員候補者選考委員会において、17名の被推薦者を会員候補者選考委員会が推薦する会員候補者としました。

当該候補者17名について、令和2年10月16日から10月23日にかけて、各部において投票を行い、令和2年10月28日開催の部長会議において開票した結果、第一部5名、第二部1名、第三部1名が部会員の過半数票を得て会員候補者に内定しました。

内定者について、書面による会員総会の承認を経て、令和2年11月11日に会員候補者として決定しました。

(4) 上申

上記会員候補者7名について、文部科学大臣に上申しました。

(5) 会員数（現員は令和2年11月26日現在）

日本芸術院会員（定員120名）は、第一部（美術：定員56名）は現員43名に5名加わり48名、第二部（文芸：定員37名）は現員28名に1名加わり29名、第三部（音楽・演劇・舞踊：定員27名）は現員24名に1名加わり25名、合計で現員95名に7名加わり102名となります。